

# 滋賀県精神保健福祉協会だより

## 「まじろ」の健康フェスタ2011に参加して



会場風景



体験コーナー



開会式

二〇一一年一〇月十六日、晴天の日曜日、「まじろ」の健康フェスタ2011」が大津市のピアザ淡海で約三〇〇人の参加者を集めて賑やかに開催されました。

ロビーでは、滋賀県精神障害者家族会連合会主催「鳩の会」による『案々展』が同時開催されており、「郷土強歩」(しが障害者就労支援センターほわいとクラブ)と題した貼り絵の大作が滋賀県知事賞に選ばれました。ま

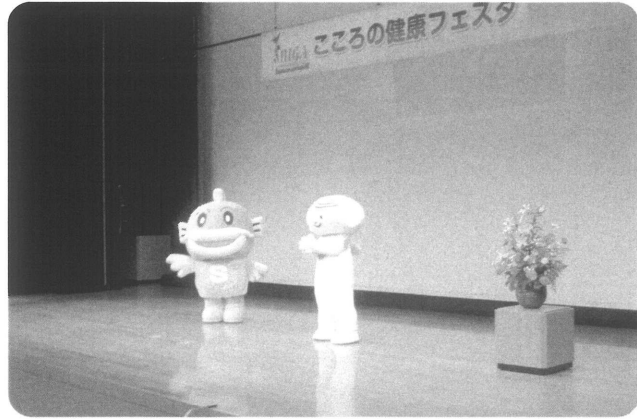
た、日本精神科看護技術協会滋賀県支部による活動紹介・幻聴体験コーナー等もあり、行列のできる人気ぶりでした。

ピアザホールのステージでは、主催者である嘉田由紀子滋賀県知事(代読、苗村光廣健康福祉部理事)、滋賀県精神保健福祉協会の辻元宏副会長(滋賀県立精神医療センター病院長)、日本精神科看護技術協会滋賀県支部の高間穰支部長よりご挨拶があり、続いて

目片信大津市長(代理、茂呂治大津市健康保健部長)より祝辞がありました。引き続き、滋賀県精神保健福祉協会表彰、滋賀県精神保健福祉事業功労者知事表彰が行われ、受賞者を代表して石田展弥氏(医療法人明和会琵琶湖病院 理事長・院長)が、「適切かつ適正な医療の供給をめざして今後も精進していきたい」と謝辞を述べられました。

次にプログラムは、「みんなで一緒

にメンタルヘルスチェック」そして「こころの健康 お笑いライブ2011」と続きました。



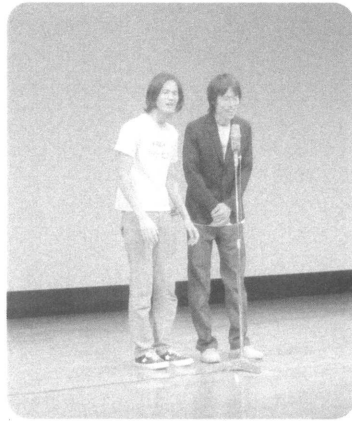
みんなと一緒にメンタルヘルスチェック

メンタルヘルスチェックは、「いのちまもり隊 隊長」のまもる君（大津市自殺対策啓発キャラクター）に扮して滋賀県立精神医療センター医長の辻本哲士氏が精神科医役として登場、キヤッフィーとの、ゆるキャラ二人の掛け合いで、会場は十分に和みました。続くお笑いライブのコンテストの出演者は四組、すっかりおなじみのNPO法人サタデーピアの精神保健福祉士二名による「メンズサタデーズ（漫才）」、東京から参加の「☆まかりな☆」

（漫才）は双子の姉妹、さらさらのシヨートボブ、かわいいミニスカートにブーツ姿で、動く、喋る。「すぼんえくす」（漫談）は着物姿が渋いお兄さん、大学を拠点に幼稚園から老人ホームまで幅広く活躍中。最後に、あまりにシュールな、と前評判高い「シュヴァルツカツ」（不条理劇）は無言で笑いをとる不思議さ。審査結果は、審査員長の太田剛びわ湖放送代表取締役より発表、優勝は☆まかりな☆、準優勝はシュヴァルツカツが受賞されました。



☆まかりな☆



メンズサタデーズ



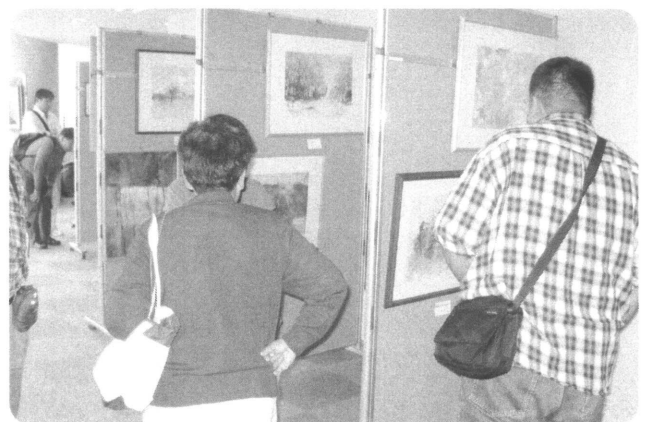
シュヴァルツカツ



すぼんえーす



お笑いコンテスト結果発表



楽々展



嘉門達夫さん

最後はスペシャルライブステージ、シンガーソングライターの嘉門達夫さんが登場。さすが「替え歌の帝王」、時代の代弁者」、ギター片手に、時に過激で時にきわどい歌とトークはまさに圧巻。圧倒的な存在感に会場は一気に沸き上がり、気がつけば会場全体熱い一体感に包まれ、そのままフェスタもフィナーレに向かって駆け抜けた、感動のステージでした。

主催者からのメッセージ、「ともに笑って暮らせる地域づくり」のとおり、老若男女、主催者も参加者も、みんな和み、大いに笑い、盛りあがりしました。

(滋賀県臨床心理士 湯澤茂子)

## アンケート集計結果

アンケート回収 80 回収率 27% (参加者300人で計算)

### ●内 訳

男性 29人 女性 51人

### ●年齢構成

1. 20歳未満 2人                      2. 20代～30代 7人  
3. 40代～50代 29人                  4. 60代以上 41人  
無回答 1人

33人がフェスタの内容が興味深かった、37人が少し興味を引かれた、3人が良くなかったと答えました。(無回答 7人)

## 今回のフェスタへの感想

- ・ 短い時間の中で密度が濃く、嘉門達夫さんのライブは大変楽しかった。
- ・ 楽しいお笑いで、心が元気になりました。
- ・ 閉じこもりがちな生活の中、とても刺激になった。参加出来たことに感謝。
- ・ メンタルヘルスチェックや幻聴体験は興味深かった。
- ・ “楽々展”の絵も書も大変すばらしく、感動しました。
- ・ 今回のテーマに合わせた専門家の話しや元気になれた体験談も聞けたら良かったのと思った。
- ・ お笑いコンテストのネタに精神保健を取り入れたのが2組だけ。少し残念。
- ・ 嘉門達夫さんのライブを取り上げた企画は良いアイデアだったと思う。
- ・ 進行がスムーズで良かった。これからもアットホームな雰囲気を取り入れてもらいたい。

## 今後のフェスタへの要望

- ・ “笑い”のテーマは続けてほしい。
- ・ “笑い”を取り入れた講演会を考えてほしい。
- ・ 精神疾患や医療についてもっといろいろ学びたい。
- ・ “楽々展”の絵と書は別々に審査して賞を出す方が良いと思った。
- ・ フェスタの回数を増やしてほしい。

## 日本人とゲール

橋本 明 (愛知県立大学教育福祉学部教授)

木曾川の峡谷を「日本ライン」と呼んだり、中部地方の山脈を「日本アルプス」と呼んだり、日本各地には欧州の景勝地にちなんだ愛称があります。この背景には日本と欧州との交流の近代史があるでしょう。他方、「日本のゲール」と呼ばれたのが京都の岩倉ですが、そこにどのような歴史的背景があったのでしょうか。

岩倉を「日本のゲール」と最初に呼んだのは、ロシアの精神科医スティーダだと言われてきました。しかし、正確に言えばスティーダはドイツ系ラトビア人です。1875年に生まれ、 Санктペテルブルクの軍医学校に学び、ドイツのハイデルベルク大学で精神医学の研究をしたあと、1904年にラトビアの中心都市リガ郊外の精神病院に就職します。しかし、その病院勤務も1ヶ月もたたないうちに、ロシアの軍医として日露戦争の戦場へと赴きました。当時ラトビアはロシア領だったのです。スティーダの責務はハルピンの病院で「戦争精神病」の研究を行い、その患者を治療・看護することでした。

日露戦争が終わるとスティーダは日本を訪れます。日本各地の捕虜収容所に残された、ロシア兵士の本国送還に関わったのではないかと推察されます。同時に東京帝国大学の呉秀三ら日本の代表的な精神医学者にも会い、東京や京都の精神病院を視察するなど、日本の精神医学の現状を視察する機会に恵まれました。敵国ロシアの軍医が、日本で歓待されたのは不思議に思われるかもしれませんが、しかし、スティーダはラトビア人として、ロシアにはむしろ反感を持っていました。また、時期的には重ならないのですが、スティーダと同じくハイデルベルクで精神医学の研究をした経歴を持つ呉とは互いに親近感を感じていたはずで

スティーダが京都にやってきたのは、1906年1月でした。洛北・岩倉の「精神病者預かり」も見学しました。岩倉の茶屋（後に保養所と呼ばれます）や農家では、古くから精神病患者を預かる伝統がありました。スティーダは同年3月に郷里ラトビアに戻ると、早くも7月には日本の精神医学に関する論文をドイツ語の医学雑誌に発表しています。この中で岩倉の伝統的な患者預かりを、ゲールの精神科家庭看護（精神障害者の里親制度）に重ね合わせて「日本のゲール」と命名したのです。この論文はただちに和訳され、日本の医学雑誌にも発表されました。明治初年には、岩倉の患者預かりは近代西欧医学の基準からは「時代遅れ」と見られ、何度かその存続が危機にさらされてきたのですが、今度は一転して「ゲールと比較しうる」と西洋人によって記述されたのです。西欧並みの近代的な精神医療施設の建設が強く望まれながらも一向に進まない現状のなかで、日本的な伝統の中に西欧に並べられるものがあるという認識は、日本の精神医学者たちのプライドをくすぐるには十分だったでしょう。今日に至るまで「西のゲール、東の岩倉」という言葉は受け継がれています。

ただ、スティーダが論文の中で「日本のゲール」と書いたことは事実だとしても、「岩倉をゲールに例える」という着想もスティーダ自身のものなののでしょうか。そもそもスティーダはなぜ岩倉を訪れることになったのでしょうか。日本に来る前に、岩倉を知っていたのでしょうか。そんな疑問が湧いてきます。結論から言えば、最初に岩倉とゲールとを精神科家庭看護という枠で捉えようとしたのは、呉秀三ではないかと考えられます。スティーダの岩倉訪問からさかのぼる10年以上前の1895年、呉は『精神病学集要』という精神医学の教科書の後編を出版しています。この中で精神病患者の「私宅看護」が取り上げられ、その例としてゲールと岩倉とが挙げられています。当時すでにゲールの精神科家庭看護は、精神病院での入院治療に代わる開放的で先端的な実践として世界的に知られていました。当然ながら西欧の動向に敏感な当時の日本の精神医学者たちは、書物や雑誌を通してゲールの歴史と現状をよく知っていたはずで

つまり、1906年のスティーダの「日本のゲール」という表現は、遅くとも1895年までには日本国内で準備されていたのです。おそらく、スティーダは来日して呉秀三に会った際に、「ゲールのような岩倉」といった説明を事前に受けたのち、岩倉に足を運んだというのが真相ではないでしょうか。

このように岩倉をゲールに結びつけ、さらには岩倉を世界の精神医療の中に位置づけるうえで、呉秀三が果たした役割は大きいものでした。しかし、呉が『精神病学集要』を出版したのは欧州留学前のことです。まだ実際のゲールを見ていません。彼がゲールを訪れたのは1897年からの欧州留学が終わりに近づいた1901年の夏でした。この訪問を確認できるのが、第3話と第5話でも話題にした「ゲール訪問許可者名簿」（扱っているのは1892年から1935年）です（→図1参照）。前後の訪問者の日付から、呉の訪問はたぶん8月上旬だったでしょう。

DESIGNATION DES VISTEURS.	QUALITE	NOM	NOM DE LA PERSONNE
<i>Dr. Kure, Shuzo</i>	<i>Directeur du Service de Clinique</i>	<i>de Psychiatrie</i>	<i>à l'Hôpital de la Ville de Tokio</i>
<i>Dr. Kure, Shuzo</i>	<i>Professeur de Psychiatrie</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>
<i>Dr. Kure, Shuzo</i>	<i>Professeur de Psychiatrie</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>
<i>Dr. Kure, Shuzo</i>	<i>Professeur de Psychiatrie</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>
<i>Dr. Kure, Shuzo</i>	<i>Professeur de Psychiatrie</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>
<i>Dr. Kure, Shuzo</i>	<i>Professeur de Psychiatrie</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>
<i>Dr. Kure, Shuzo</i>	<i>Professeur de Psychiatrie</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>	<i>à l'Université de Tokio</i>

図1 「ゲール訪問許可者名簿」にある呉秀三のサイン

図中の矢印の先に「Shuzo Kure 呉秀三」とある。



図2 百万遍の数珠を回して治療儀式を行う岩倉の患者たち  
 出典：「洛北岩倉村狂人ノ百万遍」  
 『京都医事衛生誌』第202号（1911年）

前にこの論文を読んだかも知れません。その意味で、来日前に岩倉を知っていた可能性はあります。また、1907年にオランダのアムステルダムで開かれた精神医学の国際会議では、京都帝国大学精神科教授の今村新吉らが「岩倉村」という演題で患者預かりの歴史と現状を報告しています。1911年、今度はドイツのドレスデンで開催された万国衛生博覧会で日本政府のパビリオンは、岩倉の精神科治療に関わる写真や物品（百万遍の数珠→図2参照）を出品しました。こうして見ると、スティーダが1906年の論文で「日本のゲール」と表現したことは、岩倉を知らしめたいという当時の日本人の海外戦略を代弁し、手助けをする役割を果たしたのではないかと考えてきます。

岩倉の「売り込み」が功を奏したのか、その名は海外でもよく知られることになったようです。1909年に来日したアメリカ・コロンビア大学の精神医学者ピーターソンは、横浜に入港するや、そのまま（彼の言葉を借りれば）「注目すべき」岩倉に向かっています。また、1930年5月にワシントンで国際精神衛生会議が開催されましたが、この会議に出席した慶應義塾大学精神科教授の植松七九郎はニューヨーク医学アカデミーに招かれて岩倉の紹介をしました（原稿は京都の岩倉病院院長の土屋栄吉から託され、植松が代読したのですが）。一方、ドイツ・ハンブルク大学の精神医学者ワイガントは、ワシントンでの同会議を終えて帰国途上に日本に立ち寄り、同年6月に岩倉を訪れました（→図3参照）。スティーダと同じように、ワイガントも帰国後にドイツの医学雑誌に日本訪問記を書き、ゲールに結びつけながら岩倉の精神科家庭看護を記述しています。

ところで、上記の「ゲール訪問許可者名簿」には、呉秀三以外にどんな日本人が記録されているのでしょうか。実は呉よりも前の1899年7月22日に、大阪地方裁判所所長の河村善益と宮内省の清水澄（とおる）という2人の法学者がゲールを訪れています。欧州留学中に訪問したようですが、彼らがなぜゲールに興味をもったのかは不明です。河村、清水、そして呉の次に名簿に登場する日本人は、1931年10月1日の京都府立医科大学精神科教授の久保豊二郎（いくじろう）です。欧米視察の途中でゲールに立ち寄ったようです。さらに1935年5月10日には栗村一雄という人物が、もう2人の日本人（名前は不明）とともに記録されています。栗村は日本郵船の欧州航路船「白山丸」の船医で、アントワープに停泊中にゲールを訪れたと思われるのですが、詳細は不明です。そして名簿上で最後に登場する日本人は、同年5月30日の東京帝国大学精神科の村松常雄です。村松はアメリカ留学を終えたのち、引き続き欧州に渡って研究を続けましたが、その際にゲールを訪れたようです。ただし、これら日本人のゲール訪問は呉秀三の場合とは違って、日本の精神医学に大きな影響を与えたという事実はありません。

とはいえ、その後も日本人のゲールへの関心が途切れることはありませんでした。戦後日本でも、しばしばメディアでゲールが取り上げられました。とくに影響力があったのは、E・ルーゼンス著（寺嶋正吾訳）『ギールの街の人々』（1980年、精神医療委員会。著者は「ルーゼンス」、地名は「ゲール」と記すべきだったと思われる）と映画『ゲールの里親—微笑の小都市』（1980年、園城寺プロダクション）です。両方とも内容的には古くなってしまいましたが、一昔前のゲールの雰囲気をよく伝えています。（第7話につづく）

1901年10月に呉秀三は4年間の欧州留学を終えて帰国し、数日後には東大の精神病学講座の教授に任命されます。翌1902年1月の国家医学会例会では、精神科の「家庭看護法」に言及しています。呉はその中でゲールについての詳細な報告を行い、岩倉の患者預かりがゲールと同様の近代的な家庭看護になることを望みました。

その後、ゲールとの類似性を後ろ盾に、日本人は岩倉を精神科家庭看護の実践の場所として海外に売り込んでいきます。たとえば、1903年にオーストリアのウィーンで出版された精神医学の論文集には、呉秀三による「日本の精神医学史」と題するドイツ語論文が収められており、ここで岩倉を精神科家庭看護の地として紹介しています（既に述べたスティーダが来日

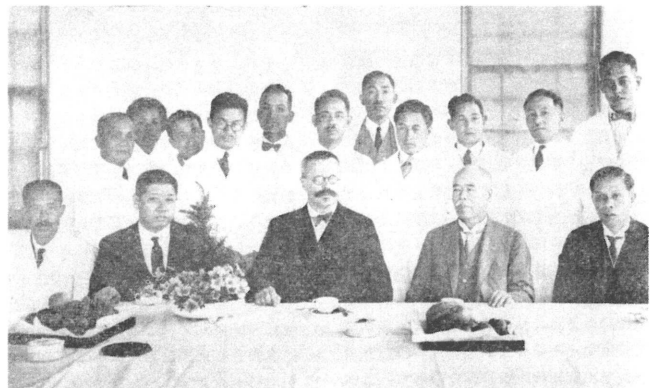


図3 1930年に来日したワイガントと東京府立松沢病院のスタッフたち  
 中央にワイガント、その向かって右隣りが呉秀三。  
 出典：『呉秀三先生誕生百年記念誌』（1965年）

# 平成23年度 滋賀県精神保健福祉協会調査研究部会事業

## 「就労と結婚を語ろう!!」に参加して

十月二十八日、高島市今津東コミュニティセンターにおいて、今年で四回目の「就労と結婚を語ろう!!」が開催されました。

地域生活支援センター「藤の樹」の西川センター長の開会挨拶に続き、座長の榎林先生からこの会の趣旨説明があり、本日のメインテーマである「就労と結婚」について二名の方からそれぞれの体験発表を伺いました。

まず結婚についてのお話では、二人が生活訓練施設で初めて出会い、退所して5年後の再会から交際が始まったという運命的ななれそめや、彼女の父親に結婚前提の交際をお願いに行った時の緊張感、結婚生活では家事を分担し、けんかをした時はすぐに仲直りする、二人でいるとほっとできる時間もあるが、時にシヨートステイを使っていることなどを話され、困った時は信頼している主治医の先生や周囲の人が二人を支えてくれ

ていると話されていました。

続いて、就労については、B型作業所から働き暮らし応援センターの紹介でトライワーク、トライアル雇用を経て現在の工場の仕事に従事して丸2年。最初から障害をオープンにしてよかったこと、仕事内容は単純作業であるが、会社に貢献できるようにすること、フルタイムで働けるようになること、単純作業以外の仕事もさせてもらえるように頑張っていきたいと仕事への意欲を語られました。ちなみに、この会社では初めての障害者雇用につながったそうです。

コーヒータイムのと、二つのグループに分かれ意見交換を行いました。体験発表についての質問や仕事に就くとき障害をオープンにするかクローズにするかどちらがいいのか、自分のやりたい仕事と実際に従事している仕事が違う時の思いは?、辞めたいと思った時はどうしているの

かなど、熱心に意見交換されていました。

グループ発表後、フリートークでは、障害はオープンにした方が、負担が軽くなり働きやすかったこと、面接時、緊張はするが先入観をもたずにやっていくことが大事、やりたいこととできることは違うので自分の身の丈にあった仕事と自分に言い聞かせている、また就労も結婚も長続きするためには、自分の楽しみをもつことが大切であるなど、これから就労、結婚を考えている人に大変参考になる内容でした。

今回、高島でこのような交流の機会がもて、日頃あまり聞く機会のない就労と結婚について語り合えたことは、とても有意義な一日でした。当日、ご参加いただいた皆さん、スタッフの皆さんありがとうございました。

(滋賀県高島保健所

岡本 不二子)





Working together for a healthier world™  
より健康な世界の実現のために

みなさまに希望をお届けするために。

様々な病気に打ち勝つため、ファイザーは「新薬」の開発に世界最大級の研究開発費を投じています\*。

\*世界企業のR&D投資額ランキング(2009年 欧州委員会まとめ)

ファイザー株式会社 [www.pfizer.co.jp](http://www.pfizer.co.jp)

 シオノギ製薬

シオノギには  
SONGがあります。

歌には、人を癒すチカラがあります。  
くすりも歌のように、人を励まし、勇気づけ、  
笑顔にするチカラがあります。

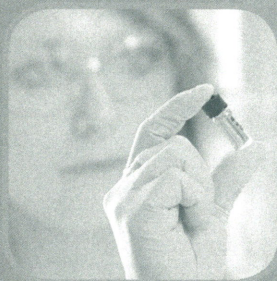
私たちは、くすりを通して  
世界中の人々の健康に奉仕できるよう、  
代謝性疾患・感染症・疼痛<sup>よなづら</sup>などの疾患領域を中心に、  
研究開発から製品情報の提供まで、  
日々努力を続けています。

すべての人々の  
クオリティ・オブ・ライフの向上をめざして、  
SONG for you! シオノギです。

S-O-N-G  
h o i  
for you!



2011.4.A42



サノフィ・アベンティスは、  
医薬品およびワクチンの  
研究開発を通じ、  
多くの人々のQOLの  
向上に取り組んでいます。

**サノフィ・アベンティス株式会社**

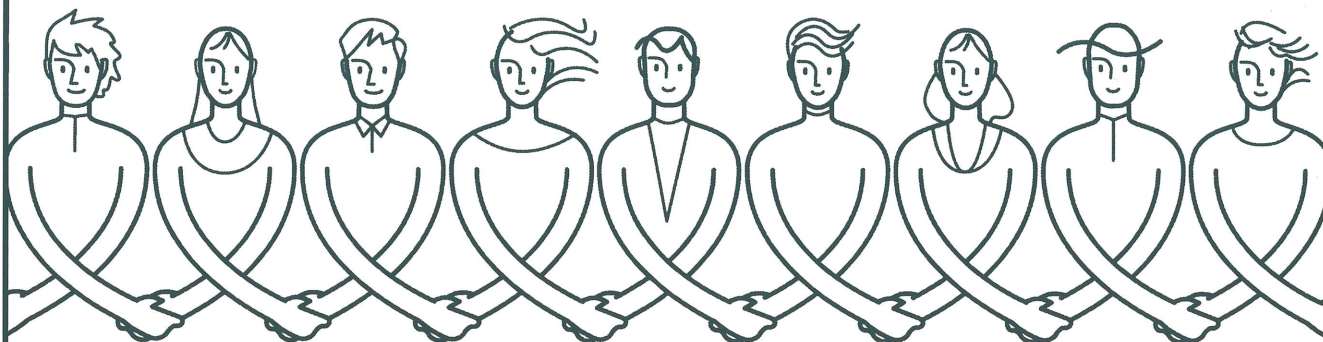
〒163-1488 東京都新宿区西新宿三丁目20番2号 東京オペラシティタワー [www.sanofi-aventis.co.jp](http://www.sanofi-aventis.co.jp)

**sanofi aventis**

Because health matters

*Lilly*

ひとりひとりの輝くあしたへ。



いっしょに、道を広げましょう。これまで、これからも。

イーライリリーは精神科医療の向上と、  
精神障害に対する「偏見」や「差別」を  
なくすための活動を支援してゆきます。

[www.schizophrenia.co.jp](http://www.schizophrenia.co.jp)

(統合失調症に関する一般の方向けサイト)

リリーの情報はインターネットでご覧になれます。<http://www.lilly.co.jp>

**日本イーライリリー株式会社**

〒651-0086 神戸市中央区磯上通7-1-5





## これまで、これからも、 「患者思考」

患者さんのことを、自分のことのように考えると、  
見えてくるものがあります。いまだ満たされて  
いない患者さんのニーズに応えるために何が  
できるか。何を優先すべきか。

私たちヤンセンファーマは、その最善の答えを  
導いていくため、これからも挑戦を続けていきます。

ヤンセンファーマは、CNS（中枢神経系）、真菌症、鎮痛・麻酔、がん領域の  
リーディングカンパニーを目指す、  
「ジョンソン・エンド・ジョンソン」グループの製薬会社です。

 ヤンセンファーマ株式会社

〒101-0065 東京都千代田区西神田 3-5-2 <http://www.janssen.co.jp>

一緒に歩こう、笑顔へ続く道。

# All for your smile

統合失調症の患者さん、  
ご家族、そして支援する  
みなさまの笑顔のために。  
大塚製薬は、これからも  
精神医療に貢献していきます。

統合失調症情報局  
「すまいるナビゲーター」は、患者さんやご家族を  
対象に、統合失調症の病気や治療、  
社会参加のために役立つ制度の  
ことなど、知っている役立つ  
情報を発信するサイトです。

すまいるナビゲーター

検索 

All for your  
smile

 Otsuka 大塚製薬株式会社

Otsuka-people creating new products for better health worldwide



GlaxoSmithKline

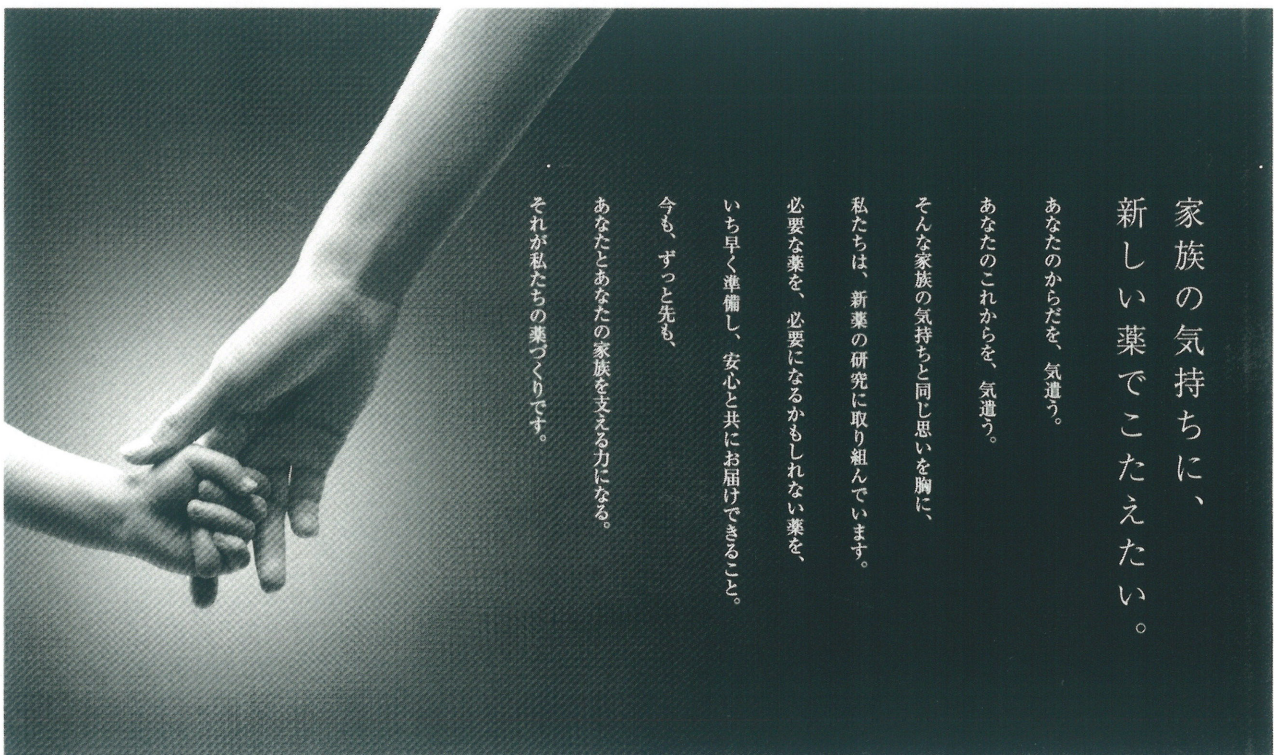
生きる喜びを、もっと  
Do more, feel better, live longer



グラクソ・スミスクラインは、研究に基盤を置く世界をリードする製薬企業です。中枢神経領域、呼吸器領域、ウイルス感染症、がん治療領域などの医療用医薬品やワクチン、「コンタック」「アクアフレッシュ」「ポリデント」などのコンシューマーヘルスケア製品を通じて、人々がより充実して心身ともに健康で長生きできるよう、生活の質の向上に全力を尽くすことを企業使命としています。

**グラクソ・スミスクライン株式会社**

〒151-8566 東京都渋谷区千駄ヶ谷4-6-15 GSKビル  
<http://glaxosmithkline.co.jp>



家族の気持ちに、  
新しい薬でこたえたい。

あなたからだを、気遣う。

あなたのこれからは、気遣う。

そんな家族の気持ちと同じ思いを胸に、

私たちは、新薬の研究に取り組んでいます。

必要な薬を、必要になるかもしれない薬を、

いち早く準備し、安心と共にお届けできること。

今も、ずっと先も、

あなたとあなたの家族を支える力になる。

それが私たちの薬づくりです。



**大日本住友製薬**

[www.ds-pharma.co.jp](http://www.ds-pharma.co.jp)

## 第4回 アディクション・フォーラム in 滋賀



平成23年7月18日、近江八幡市のG-NETしが（男女共同参画センター）において、「第4回アディクション・フォーラムin滋賀」が開催され、一般住民や自助グループメンバー、行政、医療、福祉関係者など、約160名の参加がありました。会場のロビーでは、自助グループのメンバーが「お久しぶり。お変わりない？」と声を掛け合う姿が見られるなど、賑やかに会話が交わされていました。

アディクション・フォーラムは、一般住民や支援関係者などに、アディクション（依存症）という病気の現状や課題、回復に至る経緯を知ってもらおうという目的で、県内の自助グループメンバー（びわこダルク、滋賀県断酒同友会など）や関係機関の有志などで構成するアディクションフォーラム実行委員会が、平成20年から毎年開催しています。

今年は、「仲間を見つけた、希望を見つけた～きずな。げんき。みんなと一緒に乗り越えよう～」というテーマのもと、仲間や自助グループの大切さを伝える当事者や家族の体験発表、「アディクションってなぁに？～お医者さんに聞いてみよう～」と題した、精神科医の辻本哲士先生（滋賀県立精神保健福祉センター所長）の講演が行われました。

フォーラムは、午前10時から開催され、まず、「仲間の話」と題して、滋賀県断酒同友会（アルコール依存症者の自助グループ）、JAM（様々な依存症を抱える女性の自助グループ）、家族の回復ステップ12（アルコール依存症者を持つ家族・友人の自助グループ）、NA（薬物依存症者の自助グループ）、GA（ギャンブル依存症者の自助グループ）、ACODA大阪ステップ12（子どもの時期を機能不全家族で過ごした成人の自助グループ）のメンバーから、依存症になったり、依存症者に巻き込まれたりした時から回復に至るまでの経緯が発表されました。体験談の内容は様々でしたが、とても説得力があり、皆さんが「仲間がいるから、つらい時があっても乗り越えて克服できる。」と呼びかけられていたのが、心に響きました。

「仲間の話」の後、お昼の休憩では、会場のステージにて、びわこダルクのメンバーによるバンド演奏が行われ、会場を大いに盛り上げていただきました。

午後の講演では、辻本先生から、「依存症とはそもそもどのような病気なのか？」ということ、依存症者の思考回路やそれに伴う行動から医学的に解説され、「依存症は、意思の力では回復できない。」と話された上で、「支援者だけでなく、自助グループは、依存症の回復において最も大切な存在です。」と呼びかけられました。また、誰でも依存症になる要素があることを、日常生活の中の行動などを例としてあげながら分かりやすくお話されました。

先生の講演は、とてもテンポが良くユーモアに溢れていて、会場からは何度も笑いが起きていました。最後に、「アディクション・フォーラムが、こういった形で4年も継続しているのは、全国的にもあまり例がない。関西では滋賀県だけではないか。これは、本当に奇跡的なことだと思います。」と、このフォーラムの貴重性と来年以降も継続的に開催されるよう話されて、講演は終了となりました。

この後、再び、「仲間の話」となり、あゆの会（アルコール依存症者を持つ家族の自助グループ）、NA、アルコール依存症のメンバーからの発表がありました。

フォーラムの最後には、県内外にある自助グループを、知らない人達にもっと知ってもらおうと、各自助グループの活動の内容や活動場所を紹介するグループインフォメーションが行われました。

フォーラム閉会後の交流会では、県内外から集まった自助グループメンバーや参加者がフォーラムの感想を発表し合い、日頃の思いを話し合うことでお互いが親睦を深める良い機会になったようです。

今回のフォーラムで、「きずな。希望。仲間。」の大切さ、そして、実行委員会や自助グループメンバーの力強さを実感するとともに、実行委員の1人として、今後もアディクション・フォーラムがより良いものとなるよう、努力していきたいと思いました。

（県立精神保健福祉センター 佐藤 周）

# 伝言板

## 滋賀県断酒同友会主催 市民公開セミナー 「アルコール依存と自殺問題」

日 時…平成24年1月28日(土) 13:00~16:00  
場 所…滋賀県立男女共同参画センター (JR近江八幡駅南口から徒歩10分)  
内 容…基調講演「自殺のない「生き心地のよい社会」へ」  
講師 清水康之 氏 (NPO法人ライフリンク代表)  
体験発表、パネルディスカッション

申込み…不要

問合せ…滋賀県断酒同友会事務局 TEL 077-583-4741  
滋賀県立精神保健福祉センター TEL 077-567-5010



## 日本笑い学会・笑ってメンタルヘルス滋賀 初笑い落語家さんと遊ぼう Part 10

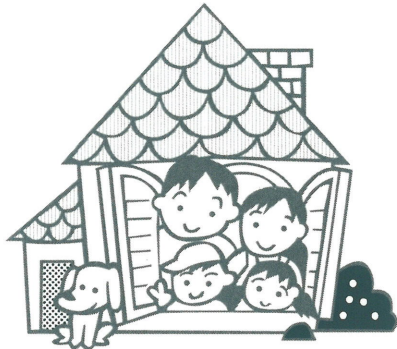
日 時…平成24年1月28日(土) 15:00~17:00  
場 所…地域生活支援センターまな (JR南彦根駅西口より 徒歩約5分)  
落 語…笑福亭生高さん、笑福亭生寿さん  
その他パフォーマンス、大喜利、落語講座

参加費…300円 (会員は無料)

連絡先…笑ってメンヘル事務局 TEL 0749-21-2192

## 滋賀県障害者地域移行促進強化研修事業

日 時…平成24年2月10日(金) 15:00~18:00  
場 所…彦根燦パレス 会議室  
講 演…「地域移行、地域定着に生かすケアマネジメント」  
野中猛先生(日本福祉大学)  
事例検討…日精診版社会生活支援(NSS)サービスを用いた  
地域移行支援事例  
対象者…精神保健福祉に関わる関係機関  
連絡先…地域生活支援センターまな  
<http://www.center-mana.net/>



## こころの会 例会

日 時…平成24年2月12日(日) 13:00~15:00  
場 所…県立男女共同参画センター研修室B  
(JR近江八幡駅南口 徒歩10分)  
内 容…現在悩んでいること、薬のこと、病気のこと、等  
申込み…「こころの会」蒲生郡日野町木津192(事務局代表 吉澤康雄)  
TEL/FAX 0748-52-2918 (この会は患者会です)

## 滋賀県自殺未遂者対策検討講演会

時 間…平成24年2月25日(土) 18:00~  
場 所…草津市民交流プラザ 大会議室  
(JR南草津駅すぐフェリ工商草津5階)  
講 師…野間俊一先生  
(京都大学大学院医学研究科 脳病態生理学講座精神医学教室)  
演 題…解離と自傷行為  
主 催…滋賀県精神神経科診療所協会・日本精神神経科診療所協会  
後 援…滋賀県  
連絡先…南彦根クリニック TEL 0749-24-7808

## 編集後記

◆2011年末は激しい寒波の日々が続いています。12/26の長浜市(柳ヶ瀬)では80cmを超える積雪があったそうです。3/11の震災直後には津波で破壊された街や大地に雪が積もって映像が映し出されていました。大切な人や物や、あるいは故郷を奪われた人たちの上に、二度目の冬が容赦なく訪れています。12/28には被災地の一次避難所は全て閉鎖されたそうです。それでも多くの人は仮設に住んだり、県外に避難して不自由な生活を送っています。自宅に戻っても地域社会が崩壊し、支援が届いていないところも多いようです。

◆福島第一原発は「冷温停止状態」に達し、「発電所の事故そのものは収束に至った」と政府は12/16に宣言しました。注水設備の多重性・多様性が確保され、「不測の事態が発生した場合でも」再び避難をお願いすることはないとのことですが、にわかには信じられません。メルトダウン、メルトスルーなどという事態が発生していることとされているのにその実態はいまだに分かりません。福島の人たちは正確な情報を与えられないまま、故郷を追い、不必要な放射線被曝を強いられ、目に見えない放射線被害の真只中に入っています。

◆滋賀県にも多くの避難者が求られています。9月末現在で、県別では福島県256人、宮城県75人、岩手県10人、その他80人です。そのうち児童生徒の転入数は、幼稚園・小中学校79人、高等学校8人です。「避難したいのに避難できない子ども」がいる一方「避難して自責感を感じている子ども」もいます。逃げて、逃げなくても大変つらい状況です。被災地でも、滋賀県内でも被災者の心のケアにあたっては、更なる被害を与えないように配慮しつつ、回復力を促進するような継続的な支援が求められていると思います。

◆被災地でのこころのケア活動の一つとして、原クリニック(仙台)、宮城クリニック(石巻)を中心とした現地スタッフの活動を、全国精神科診療所の仲間が全面的にバックアップしてきました。その活動から社団法人「震災こころのネットワークみやぎ」が生まれ、仮設住宅への訪問、僻地への生活支援を含んだ医療支援、公的機関での相談業務等を行ってきました。その活動が石巻市の「心のサポート拠点事業」の一環として位置づけられ、10/1からJR石巻駅前に「からこステーション」が開設されています。現地スタッフは被災者でもあり、その献身的な活動には頭が下がりますが、継続していくためにはより一層の全国的な支援が必要になると思います。

◆暗い話ばかりでは2011年を締めくくれません。ユーマアふれる科学研究に対して贈られるイグノーベル賞を滋賀医大の今井先生、琵琶湖病院の村上先生を中心としたグループが、9/29に受賞されました。わさびの匂いで聴覚障害者に火災を知らせる警報装置を開発したことが評価されたようです。この紙面をお借りして、あらためてお祝い申し上げます。このような独創的でかつ実用的な研究が若い医師や研究者たちに勇気や希望を与え、滋賀県に有能な精神科医を含む人材がよりいっそう結果を出すことを期待したいと思います。

(滋賀県精神神経科診療所協会 上ノ山)

## 会員数

平成23年12月15日現在

一般会員	個人会員	126名
	団体会員	36団体
賛助会員	個人会員	9名
	団体会員	7団体
サポート会員		4団体